

『平家物語』における助動詞「ーツ」・「ーヌ」

——文末に使われた場合——

鄭 霞 清

一、はじめに

完了助動詞「ーツ」と「ーヌ」は既に使われなくなったが、上代と中古（古代前期と後期）を通じてさかんに用いられた。中世に入って次第に古典化して行つた。この二語の意味と使い方は共通するところも多いが、なんとなく相違するところもある。このことについて、はやくから深い関心が払われつつづけてきて、多くのすぐれた先学がさまざまな角度から、研究されてきている。その中、アスペクト的観点から論じたのも少なくない。本稿は二語の区別の検討を主な目的としていないが、それらの先行研究の成果をふまえながら、『平家物語』におけるテ

ンス・アスペクトの表現形式とその意味、及び動詞の語彙的意味との関係を考察する一環として、主に文末に終止用法として使われた完了助動詞「ーツ」と「ーヌ」のアスペクト的使い方を論じることを試みる。

ここではまず従来の「ーツ」と「ーヌ」に関して論じた諸説の中からアスペクトの意味と関係のあるものをあげてみると、①、「ーツ」は動作の完了を表し、「ーヌ」は状態の発生を表す。「ーツ」は伴いうる語が完了的動作を意味内容とする動詞であり、「ーヌ」は伴いうる語が発生的動作を意味内容とする動詞である。

②、「ーツ」は存在、継続などの意味を表す語に接続し、継続完了を表す。「ーヌ」は動作や事象の帰着点において判断す

る語につき、瞬時完了を表す。

③、動作過程表現型動詞或いは状態過程表現型動詞には「ーツ」が承接し、動作結果表現型動詞或いは状態帰結表現型動詞には「ーヌ」が承接する。

④、「ーツ」は過程の終結を表し、「ーヌ」は過程の始発を表す。

⑤、「ーツ」は動作動詞の動作過程の局面の完成、即ち動作の終結の局面を表し、「ーヌ」は変化動詞の変化の局面の完成、即ち結果の達成を表す。

等がある。以上の①から④までの諸説は動詞の分類がアスペクトの意味から分類とは違い、「ーツ」と「ーヌ」の用法の言い方も違うが、そのあげた例と結論からみると、大体⑤の鈴木説でまとめられる。即ち、「ーツ」は動作動詞に付いて、動作の完成を表し、「ーヌ」は変化動詞に付いて、変化の完成、即ちその変化によってある状態（結果）に達成したことを表す。以上の諸説はほとんど上代或いは中古の文献から取った例の分析によって出した結論であるが、「ーツ」と「ーヌ」の二語にとって、ほとんど最後の活躍場となった中世、特に中世の代表的な文献の一つ『平家物語』においては、やはり同じことが言えるだろうか。それに同じ完了助動詞の「ータリ・リ」とどう使い分けをしているかをかねて考えてみたい。

この中、アスペクトの意味に対するとり方、動詞のアスペクトの意味の分類などについては、基本的に〔工藤真由美一九九五〕に従うが、〔工藤真由美一九九五〕にないものについては、〔奥田増雄一九七一〕と〔森山卓郎一九八一〕の動詞分類方法を参考して分類した。まず大きく動作動詞、変化動詞、性状動詞に三分類した。それから、動作動詞のなかに主体動作・客体変化動詞と主体動作動詞の二類にした。しかし、〔工藤真由美一九九五〕の情態動詞の一類は非内的限界動詞という性質では主体動作動詞と同じであるから主体動作動詞として扱う。性状動詞には「ーツ」と「ーヌ」に関する先行研究の中に多く呼ばれた状態動詞を含む。

二、「ーツ」

『平家物語』において文末に終止用法として用いられた「ーツ」は割合少なく、ただの四十一例しかない。それに一例以外、四十例は全部会話文に使われたのである。その中、動作動詞に付いたのは二十五例、変化動詞に付いたのは四例、状態動詞に付いたのは八例ある。それから形容詞カリ形に付いたのは一例、否定の助動詞ザリ形に付いたのは三例ある。本稿は主に文末の

アスペクト的意味を考えるが、「ーツ」の用法の一つとして、アスペクト的用法でない状態動詞などについて「ーツ」も考えてみることにした。

(一)、動作の完成

文末に終止用法として用いられた「ーツ」が動作動詞については一番多く、半数以上もある。動詞を一覧表にすると、

言ふ	1
申す	5
語る	1
仰す	2
伝へ聞く	1
聞きなす	1
聞きなほす	1
名のる	1
思し召す	2
思ふ	2
見る	3
見参す	1
あふ	1
すごす	1
つかはす	1
庭乗りす	1

(※数字は用例の数)十六個の動詞で、併せて二十五例がある。その中「聞きなす」の一例だけは地の文に現れたが、他は全部会話文である。

その中、明かに既に終わった動作について述べるのはほとんどである。例えば、

- 1、かの女房暇申してかへりけるが、「(中略)『何事でもおほしめさん御事をば承って申せ』とこそ兵衛佐殿は仰せられ候ひつれ」。(巻⑩三〇五)

2、北の方、「さていかにやいかに」と問ひ給へば、「(中略)

とこそ、御供申したりける舎人武里はかたり申し候ひつれ」と申しければ、(以下略) (巻⑩三三八)

のように、誰某は何をしたという主体が第三者で、すでに行った動作の内容について会話する文であるから、動作が完成し、

動作の終結の局面を表すのは言うまでもない。このような例は合計十二例ある。また、動作の主体は話者自身であるが、後続

の文よりその動作が既に終わったことを表すものもある。例えば、3、「あはれ汝七歳にならば、男になして君へ参らせんとこそ思ひつれ。されども、今は云ふかひなし。もし命いき

て、おひたちたらば、法師になり、我後の世とぶらへよ」と宣へば、(以下略) (巻②一六二)

4、「(中略)おのおの是におはしつる程こそ、春はつばくらめ、秋は田のむの鷹の音づるる様に、おのづから古郷の

事をも伝へ聞ひつれ。今より後、何としてかは聞くべき」とて、もたえこがれ給ひけり。(巻③二〇四)

のように、3の例は今までずっとそう思っていたが、「今は云ふかひなし。もし」の後続文から、もうそう思わないことがわかる。今までの「思う」という動作はもう終了してしまったという

ことを表す。4の例も「今より後」の文より、「伝へ聞く」という動作はすでに完成した動作として表現しているのである

という動作はすでに完成した動作として表現しているのである

る。このような例は計十例ある。また、唯一の地の文の文末に用いられた「一ツ」の例を見てみると、

5、其夜しも法住寺殿に御宿直して候ひけるに、常の御所のかた、よにさはがしうささめきあひて、女房達しのびねに泣きなぞどし給へば、何事やらんと聞く程に、「(中略)」といふ声に聞きなしつ。「(中略)」とて、やがて六波羅へ馳せ参り、(巻⑦八四)

のように、まず「ささめきあひて、」などがあつたため、「聞く程に」で「聞きなしつ」、それから「やがて」「馳せ参り」のよりに出来事の発生順に追つて継起的に語っている。であるから「聞きなしつ」が既に終わった動作を表すと言へる。つまり地の文でも動作の完成を表すとは言へる。しかし、

6、入道出であひ対面して「今日の見参は、あるまじかりつるものを、祇王がなにと思ふやらん、余りに申すすむる間、か様に見参しつ。見参するほどにては、いかでか声をも聞かであるべき。今様一ツ歌へかし」と宣へば、(以下略)(巻①五二)

7、良久しうあつて大臣殿、「さらば副将、とくかへれ。うれしう見つ」と宣へども若公かへり給はず。(巻④四二二)の二例は後続の「歌へかし」「かへり給はず」の文から見ると

「見参す」も「見る」もまだ続いている動作しか見えない。しかし、もうちょっと前の文脈から考えると、一種の動作の完成とも言えると思う。5の例は仏御前が自ら推参したが、最初は入道相国が「今日の見参は、あるまじかりつるものを、」といったように対面しようとしなかった。しかし「祇王がなにと思ふやらん、余りに申すすむる間、か様に」対面してやつた、仏御前の最初の目的が達成したという点から言えば、一種の動作の完成とも言へる。6の例も同じことが言へる。ずっと副将に会いたかつた大臣殿の気持ちとしてやつと「うれしう見つ」のであるから、やはり一種の動作の完成と言へると思う。それに「見参す」も「見る」も主体動作動詞である。「工藤真由美一九九五」によれば、主体動作動詞は非内的限界動詞であるので、必然的終了限界がなく、どこで終わつても動作が成立したと言えるものである。この主体動作動詞の性質からいっても5と6の例の「一ツ」もやはり動作の完成を表すと考えられる。ただ前の例と違うのは動作をひとまとまりとして表すのではなく、動作の開始限界達成しか表していないのである。

つまり、助動詞「一ツ」は動作動詞につくと動作の完了を表すが、動作動詞の中の主体動作動詞につくとき、動作の開始限界達成を表す場合もある。

(2)、変化の完成即結果の達成

『平家物語』において「一ツ」が文末に変化動詞につくのは「見ゆ」と「心がはりす」の二語の二例ずつで、計四例ある。一例ずつ挙げて見ると、

8、「山門は心がはりしつ。南都はいまだ参らず。此事のびてはあしかりなん。(中略)」とぞ歎議しける。(巻①三二)

四)

9、「てんがいの門の南のかたに、大衆何十人をへだてて、あやしぼうたる者の見えつる。召しとって参らせよ」と宣ひければ梶原承つてやがて具して参りたり。(巻②四九八)

のように8の例は今山門はもう心が変わって、自分達の味方でない状況について述べた会話文である。9の例は「あやしぼうたる者」を捕えてこいという命令の会話文である。いずれも、「一ツ」によって「心がはりす」「見ゆ」という変化が既に行われて、今そういう変化の結果の局面にあることを表す。先行研究によれば、「一ツ」はふつう動作動詞につくものなのに、ここでは変化動詞に付いている。8の例の「心がはりしつ」のような急な変化であるから、ふつう「一ヌ」がつくものを「一ツ」にしたとされている。しかしこういう使い方は臨時的な使い方

としても、「変化が完成し、変化の結果の局面にある」というアスペクトの意味を表す機能を持っていたのは間違いないから、アスペクト的使い方の一つとして考えるべきであろう。

(3)、状態独立の完成

状態動詞は運動を表さないので、アスペクト的意味の用法をもたないが、『平家物語』において文末に状態動詞及び形容詞の「カリ」形、否定の助動詞「ザリ」形に「一ツ」がついた例は計十二例ある。(※形容詞の「カリ」形も否定の助動詞「ザリ」形も「あり」との複合によってできたものであるため、一括して状態動詞として扱う)。それに十二例のいずれもすでに存在したことに於いて述べる会話文である。例えば、

10、家貞待ちちうけ奉つて、「さて、いかが候ひつる」と申しければ、かくともいはまほしう思はれけれども、(中略)、「別の事なし」とぞ答へられける。(巻①三九)

11、大納言の北の方は、此世になき人と聞き給ひて、「(中略)見もし見えんとてこそ、今日まで様をもかへざりつれ。今は何にかはせん」とて、善提院と云ふ寺におはし、様をかへ、(以下略)(巻②一七〇)

の10の例のように既に過ぎた出来事の状態について話すか、11の例のように話している時点まではまだその状態であるけれど

も、話者の意識の中では話しと同時にその状態も終ろうとしたことと話したのであろう。故に、前の動作の完成と変化の完成と合わせて考えると、その時代では、元々存在した状態を一つまとまったこととして、概念の中で現在の状態と切り離して一枚の画のように独立させ、完成させることができるものだという感じで扱われていたのであろう。即ち「一ツ」が状態動詞に付いて、ある状態を一つまとまったこととして独立し完成することを表すのであろう。

三、「一又」

『平家物語』において文末に終止用法として用いられた「一又」は合計二百一例がある。その中、地の文は百五十六例、会話文は四十例、書簡は四例、歌は一例ある。(その他、四十八例が受身動詞と使役動詞である。今回の検討対象から外す)。動詞種類からいうと、二十一例の動作動詞以外ほとんど変化動詞である。

(一)、変化の完成

12、「君既に都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はやつき候ひぬ。撰集のあるべき由承り候ひしかば、生涯の面目に、

一首なりとも、(中略)」とて、(以下略)(巻⑦九八)

13、北条も、「文覚房の約束の日教も過ぎぬ。さのみ在京して年を暮すべきにもあらず。今は下らむ」とて、(以下略)

(巻⑩四七九)

のように既に行った変化について述べて、変化したあとの局面に達成したことを表す。こういう場合、消失や退出或いは時の推移などの意味を表す動詞が多い。それに「既に」とか「はや」のような副詞が伴うものもあるから、変化の完成を表すと容易に判断できる。これは地の文においても同じことが言える。例えば、

14、彼親王の御子、高視の王、無官無位にしてうせ給ひぬ。

其御子、高望の王の時、始めて平の姓を給はつて、(以下

略)(巻①三六)

15、「中略」とてつきいでぬ。奈古屋にかへつて、弟子共

には、伊豆の御山に人にしのんで七日参籠の心ざしあり

とて、いでにけり。(巻⑤三九四)

のように会話文ほど変化の結果の局面に達成したことがはっきりしていないが、出来事の発生順に継起的に語っていて、「はや」などのような、完了を表す副詞が伴うものもあるので、その変化がすでに終ったことはやはり判断できる。地の文の場合、

このように出来事の発生順に追って継起的に変化して行くことを表すのが非常に多い。これは『平家物語』の編年体的に構成された特質にもよるものであろう。それに、会話文と同じように、消失、退出、時間の推移などを表す動詞につくのが一番多い。その次に多いのは「なる、とどまる、しつまる」のような状態の変化を表す動詞である。例えば、

16、師光は左衛門尉、成景は右衛門尉とて、二人一度に、叙負尉になりぬ。(巻①八九)

17、太政入道やうやうになだめ給へば、山門の大衆しつまりぬ。(巻①二七六)

のような例も変化が完成し、その変化の結果の局面に達成したことを表す。要するに、会話文でも地の文でも変化動詞につくと変化の完成を表す。

(2)、動作の完成

動作動詞につくのは少ないが、二十一例ある。その中、会話文に使われたのは十例ある。例えば、

18、「去八月十七日、伊豆国流人右兵衛佐領朝、しうと北条四郎時政をつかはして、伊豆の目代、和泉判官兼隆を、やまきが館で夜うちにうち候ひぬ。其後(中略)とこそ申したれ。(巻⑤三六八)

19、「(中略)ちかう参ッて見参にも入りたかりつれども、はばかりもぞおぼしめすとて通りぬ。あな哀れの御有様や」とて、(以下略)(巻⑩三三三)

の二例のように既に過ぎたことについて述べるのであるから、その動作をひとまとまりとして完成したことを表す。これは地の文でも同じことが言える。例えば、

20、備後国住人、額入道西寂、(中略)高細城にて、河野四郎通清をうち候ひぬ。子息河野四郎通信は、(中略)「やすからぬものなり。いかにしても西寂をうちとらん」とそうかがひける。(巻⑥四四七)

21、国々宿々うち過ぎうち過ぎとほりぬ。尾張国内海といふ処あり。ここは故左馬頭義朝が誅せられし所なれば、これにてぞ一定と思はれけれども、それをもすぎしかば、(以下略)(巻⑩四三三)

のようにやはり出来事の発生順に追って語っているので、「うち候ひぬ」「とほりぬ」は完成した動作を表すことがわかる。動作動詞に付いて動作の完成を表す点では、会話文も地の文も同じである。

また、必然的終了限界のない主体動作動詞につく時、ひとまとまりの動作としての完成ではなく、開始限界の達成を表す例

もある。例えば、

22、「(中略)彼鶏鳴たかき所にはしりあがり、にはとりのな
くまねをしたりければ、関路のにはとり聞きつたへて、み
ななきぬ。其時関守鳥のそらねにはかされて、関の戸あけ
てぞとほしける。(中略)」とぞ申しける。(巻④三二八)
の「鳴きぬ」は「鳴く」といふ動作が終つたのではなく、「鳴
く」ように「鳴きたす」といふ動作の完成である。即ち「鳴く」
動作の開始限界の達成である。

四、「ーツ」と「ヌ」の使い分け

ここでは、まず、『平家物語』においては、文末に終止用法
として使われた「ーツ」と「ヌ」のアスペクト的使い方、
それぞれまとめると、

「ーツ」：主に動作動詞に付いて動作の完成を表す。その中、
動作をひとまとまりとして完成したことを表すのと、
主体動作動詞についた場合の動作の開始限界の達成を
表すものもある。それに、変化動詞に付いて、変化の完
成即ち結果の達成を表すものもある。それから、アスペ
クト的使い方ではないが、状態動詞などにつくとき、

状態の独立完成を表す。

「ヌ」：主に変化動詞に付いて変化が完成し、変化の結果
の達成を表すが、動作動詞に付いて動作の完成を表すこ
ともできる。それに「ーツ」と同じように動作動詞の中
の主体動作動詞に付いて動作の開始限界の達成を表す例
もある。

のように「ーツ」の状態動詞などに付くものを除いて、主に付
く動詞を先に述べて、ちょうど反対になっているが、アスペク
ト的使い方としては「ーツ」と「ヌ」はほとんど区別がない。
この点では二語が共通しているのである。それなら、『平家物
語』において、文末に使われたこの二語はどう使い分けをして
いるのであろうか。上記の例から、二語の違ったところを考え
てみることにする。

(一) 接続する動詞の種類が偏っている。

「ーツ」は主に動作動詞に付き、「ヌ」は主に変化動詞に
付く。この動作動詞と変化動詞による使い分けは先行研究の中
にしはしば言われていた。「ーツ」には二つの動詞の例外があ
り、「ヌ」にも十分の一の例外があるが、この使い分けの点
では、おおよそ前の時代の使い分けとはあまり変わっていない
と考えられる。

しかし、文末には「一ツ」は状態動詞などにも付くが、「一ヌ」は状態動詞につくものはなかった。それに「一ツ」は通達動詞につくのが多いのに対して、「一ヌ」は通達動詞にはついたら例はなかった。これは「一ヌ」の使う範囲がこの時期から縮め始まったためであらうか。

(2) 別々の動詞につく。

「一ツ」と「一ヌ」は多かれ少なかれ動作動詞にも変化動詞にもつづくが、次の例の一つの動詞以外、二語が付く動詞は重なっていない。

23、小松の三位の中將維盛卿の若君、六代御前につき奉たる齋藤五、齋藤六、あまりのおほづかなさに、様をやつしてみければ、(中略)「小松殿の君達には、備中守殿御類ばかりこそ見えさせ給ひ候ひつれ。其外はそんぢやうその類、其御類」と申しければ、(以下略)(巻⑩二七五)

24、「是まで具し参らせ候ひつるは、別の事候はず。もしみちにて聖にもや行きあひ候と、まちすくし参らせ候ひつるなり。御心さしの程は見え参らせ候ひぬ。山のあなたまでは、鎌倉殿の御心中をも知りかたう候へば、近江国にてうしなひ参らせて候よし、披露仕り候べし。誰申し候とも、一業所惑の御事なれば、よも叶ひ候はじ」と、

泣く泣く申ければ、(以下略)(巻⑩四八二)

のように両方とも会話文である。其の他「見ゆ」という動詞の例がもう一つあって、本稿の例9であり、やはり会話文である。それに、両方とも変化動詞に付いて変化が完成したことを表し、同じアスペクトの意味である。ただ、24の例は普通の「一ヌ」が変化動詞に付くという説を取るなら、9と23の例は変化が急であるから、元々「一ヌ」が付くべきところに「一ツ」が付いたとすると、9の例の「あやしばう者」が急に「見えつる」と解釈してもおかしくないが、23の例の場合、齋藤五、齋藤六は「様をやつして」いたが、わざと見に行つたのであるから、「御類ばかりこそ」急に「見えさせ給ひ候ひつれ」とは言いにくい。むしろ、「小路一光一九六」説のように話者が主体的立場において述べるか、傍観的立場において述べるかという考え方で考えたほうが分かりやすい。齋藤五、齋藤六にとって、それらの「御類」は傍観者の立場から述べることができないうが、24の例の六代には同情の気持ちがあるが、鎌倉殿の命令にも逆らうことができないう。それゆえ、少しでも六代に自分の気持ちを理解してもらうためわざと傍観者の立場において述べたと考えられる。急か急でないかの説は他のところでは通用できるかもしれないが、ここの「見ゆ」という動詞には通用できないようである。

ある。「見ゆ」は変化動詞と言ふより状态的性質もあるためであろう。従つて、9と23の例は当然の使い方だとしたら、24の例は例外だと考えたほうが妥当であろう。

(3)「一ツ」は会話文によく使わたるに對して、「一ヌ」は地の文に使われたのが多い。

これは小路一光氏が万葉集の用例によつて「一ツ」「一ヌ」の意味・用法を分析した結論と同じように主観的表現と客観的表現によるものであらう。「一ツ」は話者の主体的立場において述べる場合に用いられるものであるから、会話文に多く使われ、「一ヌ」は話者の傍觀的立場において述べる場合に用いられるものであるから、地の文に多く使われたのであらう。特に語り物として成立した『平家物語』においては、尚更この區別がはっきりしているのであらう。

五、「一ツ」「一ヌ」と「一タリ・リ」との使い分け

この四語は共に完了助動詞と呼ばれている。同じもので、四つも存在していたのはその間に何か相違する点があるはずであらう。ここでは、『平家物語』において、どう使い分けられているかを考察してみる。筆者の「甲南国文」四五号に載せていた

いた小論の結論によれば、まず大きな相違点を挙げると、

①「一タリ・リ」は動作が今まきに行つてゐるといふ動作の継続を表すが、「一ツ」と「一ヌ」にはそういう使い方がない。

②「一タリ・リ」は「似る」「優れる」のような性状動詞につくが、「一ツ」と「一ヌ」はつかない。逆に「一ツ」がつく「あり」のような状態動詞などには、「一タリ・リ」はつかない。

③「一タリ・リ」は單純状態を表すが、「一ツ」と「一ヌ」は表さない。

それから、共通するのは動作或いは変化の完成を表すことである。それにおいてもはっきりとした相違点がある。

①「一ツ」はほとんど会話文に言及された動作或いは変化の完成であるに對して、「一タリ・リ」が表す動作或いは変化の完成は全部地の文である。例えば、

25、「(中略)武藏国の住人玉の井の四郎資景とこそ名のり申し候ひつれ。(以下略)」(卷⑨二五九)

26、同与一親範、伊勢三郎義盛とそ名のつたる。(卷⑩三六三)は同じ動詞に付いて、同じ完成の意味を表すが、25の例は会話文であるに對して、26の例は地の文である。其の外「名のる」はまだ六例があるが、全部「一タリ」が付いて、全部地の文に

使われた。

②「ース」は主に消失、退出などのような場面から消えていく完成を表す語につくが、「イタリ・リ」が付いたのはその反対で、場面に現れた語に付く。例えば、

27、聖むさんにおぼえければ事の子細をとひ給ふ。(中略)「いでいでさらば行きむかひて尋ねむ」とてつき出でぬ。此詞をたのむべきにはあらね共、聖のかくいへば今少し人の心地いできて、大覚寺へかへり参り、(以下略)(巻②四七六)

28、やうやう日もくれければ、大将出でられたり。競かしこまッて申しけるは、「(中略)」と申しければ、大将、「もッともさるべし」とて、(以下略)(巻④三〇四)

のように、同じ動詞の「出づ」であるが、27の例の場合、主体の「聖」が「出でぬ」によって、場面から消えてしまうが、28の例の場合、場面に現れたことを表す。それ故、「失す」「かくる」「死ぬ」などのような言葉は合わせて、文末に完成の意味として使われたのが三十四例あったが、全部「ース」が付いている。昔ふつう「ース」のつかない「死ぬ」にも「ース」が付いていた。

要するに、「イタリ・リ」は修飾語、文体及び動詞の語彙的意味などによって大きく影響され、

(1) 動作の完成

(2) 動作の継続

(3) 動作あるいは変化の結果の存続

(4) 変化の完成とその結果の存続

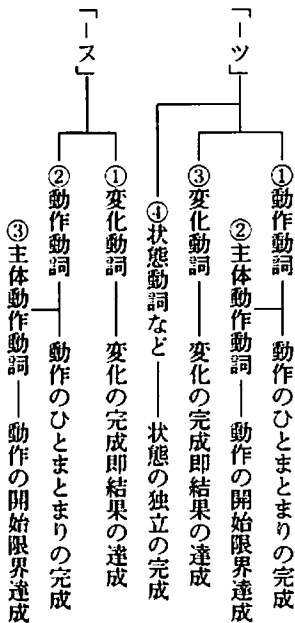
といった四種類のアスペクトの使い方と、(5) 単純状態

(6) 性状動詞につくものといった用法があって、点と線の問題をしているに對して、「イツ」「ース」は完成、或いは達成といった

点だけを問題にしている。

六、おわりに

以上の「イツ」「ース」の使い方をまとめて図にすると、



になる。本稿は主に文末の「ーツ」「ーヌ」のアスペクト的意味を考えた趣旨であるため、従属文、或いは「キ」「ケリ」と重なって使われたものに対しては今回の検討対象からははずされた。それによって、「ーツ」「ーヌ」の使い分けが文末だけにおける使い分けになったが、『源氏物語』の時代より以前のものとは比べれば、『平家物語』の時代の完了助動詞「ーツ」と「ーヌ」との主観的表現・客観的表現とか行為的表現・自然的表現といった違いがやはり存在するが、アスペクトの意味の違いがなくなり、段々一本化になりつつあると言えるのではなからうか。

〈参考文献〉

- 中西宇一 一九五七「発生と完了」『国語国文』26—8
 種友明 一九六六「助動詞「つ」「ぬ」——其の活用と意味との関係——」『和洋国文研究』4
 小路一光 一九六六「いわゆる完了の助動詞「つ」「ぬ」の意義用法——万葉集の用例により——」『国文学研究』33
 井手至 一九六六「古代日本語動詞の意味類型と助動詞ツ・ヌの使い分け」『国語国文』35—5

高橋太郎

一九六九「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』（金田一春彦編 一九七六）むぎ書房

此島正年

一九七三『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社

奥田靖雄

一九七八「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」『日本語研究の方法』むぎ書房

寺村秀夫

一九八四『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

森山卓郎

一九八八『日本語動詞述語文の研究』明治書院

西田直敏

一九九〇『平家物語の国語学的研究』和泉書院

吉田茂晃

一九九二「完了の助動詞」考——万葉集のツとヌ——『万葉』141

鈴木泰

一九九二『古代日本語動詞のテンス・アスペクト——源氏物語の分析——』ひつじ書房

工藤真由美

一九九五『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房